YMCA石巻支援センター（東京YMCA・仙台YMCA）

支援の学びと経験を生かして次へ

YMCAのなかった石巻地域に東京YMCAが中心となって支援に入り、その後、地元の協力を得て商店街にYMCA石巻支援センターを開設。全国YMCAが支えたこの拠点は現在、仙台YMCA、石巻広域ワイズメンズクラブにより、その活動を継続しています。

2012年度から２年間は駐在スタッフとして「子ども支援」「コミュニティ支援」「ワークキャンプ」を中心に活動をしました。意識したのは「隣人になる」こと。

支援活動から学ぶことは多いと実感しています。

（東京YMCAスタッフ　伊藤剛士）

震災直後は、瓦礫（がれき）だらけだったが、瓦礫に見えても被災者にとっては大事なものかもしれない……「ゆっくりでいいですよ」と寄り添って片付けを行った。（写真は2011年3月）

商店街の集会所などで学習支援・遊び場プログラムを2012年夏より実施。東京YMCAの専門学校や学生寮（山手学舎）、学生YMCAのユースたちが勉強指導や遊びを通して大勢の子どもたちと触れ合った。

震災直後から始まった東京YMCAのランタンプロジェクトでは、被災地の保育園、小中学校、避難所、公民館などに計1,583個のLEDランタンを届けた。

2012年夏に始まった学童保育支援。「学童保育支援があって助かった」と言う保護者や指導員も多い。

2011年11月に開設したYMCA石巻支援センター。

女川町総合運動公園仮設住宅の子どもたちを対象に、リーダーたちが子ども遊び場プログラムを実施。（写真は2012年10月）

米国・バージニア州リッチモンドと石巻市の中高生の国際交流を３回実施。石巻で被災して亡くなった英語教師テイラー・アンダーソンさんのメモリアル基金の支援で来日した高校生が、石巻の高校生と共に「川開き祭り」を楽しむ。（写真は2014年夏）

2013年９月、震災で被害が大きかった牡鹿半島部の漁港でカキ養殖を手伝うユース。

石巻小学校でのプール指導は2011年夏に始まり、今も恒例。子どもたちも楽しみにしている。

米国・マサチューセッツ州BCC YMCAの中高生が仮設住宅で花壇作り。

一緒に思いっきり遊ぶ

子どもたちと遊ぶうちにリーダーたちは「いつも接している子どもたちと少し違う」と感じた。「だっこして」「手をつないで」と触れ合いを求める子が多く、子どもたちの思いに応えようと一緒に思いっきり遊んだ。

地域の光となる人びと

歌の広場
西村富子さん

YMCAの伊藤さん、ワイズメンズクラブの吉田さんが歌の広場で仮設へ支援に来てくれたのが始まりです。復興公営住宅に移ってからは、まずは自分から楽しもうと、私がキーボード担当で、今「ピーちゃんサークル」を作って（現在6人）、集会所で皆さんと歌っています。歌は生きる力。失った物は多いけど、心の財産が増えたと思います。

ワイズメンズクラブを中心に仮設住宅の方々に「歌の広場」を始め、今も続いている。歌った後は「お茶っこタイム」。

2011	2012				2013	2014	2015			2016	2017
3.11 東日本大震災 東北地方太平洋沖地震	9/29 応急仮設住宅建設完了	10/11 全ての避難所閉鎖	11/7 石ノ森萬画館がリニューアルオープン	12/1 災害危険区域の設定	7月 網地白浜海水浴場営業再開	4/1 復興公営住宅の入居開始（市街地、半島部9/20）	3/21 JR女川駅再開、JR石巻線全面再開	5/30 JR仙石線が全面再開	10/4 三陸自動車道、石巻女川IC開通	9/1 石巻市立病院再開	

Interview

今もYMCAがあったらいいな！

（二人のお子さんがYMCAプログラムに参加）　今野香奈子さん

2017年春、仁君は高1、結ちゃんは小6になった。左は香奈子さん

子どもたちが今も言います、「YMCAがあったらいいな」「バッハ※」に会いたいな」って。

震災当時、上の仁は小３、下の結は幼稚園でした。理学療法士の私は職場にいましたが、すぐに結を迎えに行き、85歳の曾祖母が待つ家に帰りました。夫と私の母が間もなく帰宅してきたので、みんなで仁を迎えに行き、日和山へ逃げたんです。恐ろしい波が自宅に押し寄せる様子を、山から見ました。家は流されませんでしたが、２階にあったピアノの鍵盤まで水がきて、家の中は滅茶苦茶でした。それでも幸いなことに、２階の天袋に入れていた写真は無事だったので、家族の思い出は残りました。

YMCAとの出会いは、学校からもらってきた夏休みの学童保育のチラシです。結は小学校で初めての夏休みでしたが、曾祖母が入院して母が付き添うことになって家は留守、子どもたちをどうしようと思っていたところに、「お弁当を持っていけば、１日一緒にいます！」というようなことが書いてあったので、本当に助かりました。

プールも学習支援も、YMCAのプログラムは本当にうれしそうに行きました。帰ってきたら「お姉さんがほめてくれたよ」「お兄さんに乗っかって遊んだよ」と、夢中で報告をしてくれました。

今回、この取材を受けることを機に、YMCAの思い出をあらためて子どもたちに聞いてみました。すると４つ出てきました。

まず、二人声をそろえて言ったのが「バッハ」。そしてリーダーたちのお名前が出てきましたね。次は外遊び。羽黒山に連れて行ってもらい、お兄さんやお姉さんと野山を駆け回り、小さいスペースで野球をしたことが楽しかったようです。三番目は、遊んでいる最中に仁が肘を骨折して、その後、バッハさんが何度も家に来てくれたことを言いました。YMCAの補償制度があるから、と本当に誠意をもって対応してくださいました。四番目は、最終日に親子３人で、お兄さんお姉さんたちにお礼をしよう！ ということで、おにぎりを作ったんです。唐揚と浅漬けも付けて……そしたら皆さん「おいしい、おいしい」と食べてくださって、それがうれしかったみたいです。

震災後の大変な時に、子どもたちのストレスを和らげてくださったことに感謝しています。今、家は別の場所に再建し、みんなで住んでいます。YMCAのこと、優しくて頼りになるお兄さんやお姉さんのことは、子どもたちはもちろん、家族みんな忘れません。また機会があれば参加したいと思っています。

※2012年～2013年、石巻支援センターに常駐した東京YMCAスタッフで、ピアノや歌が得意な伊藤剛士さんは“バッハ”と呼ばれ親しまれていました。

このチラシが、今野さんとYMCAとの出会い

COLUMN 支援者を支える②

支援者もまた、被災者である

東日本大震災の発生当初から救援活動に携わり、復興を支えてきた支援者の中には、長引く活動の中で消耗感や焦燥感を覚え、罪責感や無力感に見舞われる人も少なくありません。災害支援は人間の苦しみにかかわる「情緒的活動」であり、心の疲弊が顕著に現れる活動領域だからです。圧倒される現場にあって、常に責任ある職務を担おうと役割意識を持ち、心身能力の限界を超えてなお自己に活動を強いることで疲弊してしまう……。

忘れられがちですが、救援に駆けつけた支援者もまた被災者なのです。しかし、さまざまな要求や支援の必要性から被災者へのケアを第一に考えるあまり、自身が心身を疲弊していることに気付きにくいのです。

（帝京平成大学名誉教授　中谷三保子）

YMCA石巻支援センターの主な支援活動

石巻市の状況
（YMCA石巻支援センター所在市）
- ●死者3,166人、行方不明者：434人
- ●住宅全壊19,974棟、半壊13,098棟、一部破損23,615棟
- ●被害総額：港湾施設162億円、漁港約1,673億円、農林関係約634億円、畜産約2.51億円他
- ●避難所：最大時259カ所、50,758人（平成23年3月19日時点）

《「石巻市の復興状況について」平成26年1月石巻市発行より》

YMCA石巻支援センター所在地：石巻市立町1丁目5-11

支援から何を学び、未来へ何を継承するか

Learning 学び

- ◆東京YMCA専門学校・ボランティアリーダーと地元の小学校との関係性を継続させ、学習支援や遊び場で子どもを支援した。
- ◆ワイズメンズクラブの協力による「歌の広場」が仮設住宅の被災者たちに寄り添った。
- ◆日常の活動を通して人びとや子どもたちに寄り添うことの重要性を再確認した。
- ◆支援の延長線上に「石巻広域ワイズメンズクラブ」が誕生した。
- ◆支援活動を開始するにあたり、情報・移動手段・拠点を確保することが大切だった。

Inheritance 継承

- ●地元の人びとからの信頼を得て関係を構築。その結果、継続的で有効な支援が可能になる。
- ●YMCA専門学校の学生たちやボランティアの専門分野での活動。
- ●YMCAを支援するワイズメンズクラブの特徴や力を生かした連携。
- ●中高年の方々の生活不活発病を防ぐ大切さ。自ら活動できる機会をいかに作るかを常に模索。
- ●YMCAがない被災地でYMCA活動が根付く機会とする。
- ●被災地にあるYMCAの最小限の負担で、全国のYMCAが可能な限り自立して、支援者の派遣を行う。